

コラージュ制作が状態的な自尊感情及び自己効力感に及ぼす影響 — 統一素材を用いた検討 —

The Effects of Collage Work on state Self-Esteem and Self-Efficacy — Using the Standardized Materials —

鵜木 恵子
Keiko UNOKI

要 旨

本研究の目的は、大学生がコラージュ制作を行うことで、状態的な自尊感情や自己効力感に変容するかを検討することである。従来の研究とは異なり、調査対象者全員に同一の雑誌媒体を使用することで、素材の条件統一を行った。対象は、女子大学生102名である。学籍番号の偶数、奇数により2クラスに分け、偶数番号は統制群（47名）、奇数番号はコラージュ制作群（55名）とした。同日に調査を行い、統制群には通常授業の前後、コラージュ制作群には制作前後に自尊感情尺度、自己効力感尺度への回答を求めた。その結果、両群とも制作や授業の受講の前より後において自尊感情が高まっていた。また、コラージュ群は、統制群に比べて事前よりも事後に有意に自己効力感が高まっていた。コラージュ制作自体が、制作者の自尊感情及び自己効力感の一時的な向上に関与する可能性について考察した。

I. 問題と目的

1. コラージュ療法

コラージュ療法とは、「雑誌などの印刷物からの切抜きを台紙に貼り付けて作成してもらい、作品内容や制作行動を手がかりにクライアントの内的世界や心理的状态を理解しようとする心理療法」である。この療法は、箱庭療法と共通する特徴を持ちながらも、施行に関しては特別な場所や道具

を必要とせず、誰でもどこでも行うことができる、という利点がある。また、適用範囲が広いのも特徴である。統合失調症（ただし急性期を除く）や精神遅滞児にも適用できるため、病院臨床に限らず、教育や福祉、非行臨床にも用いられてきた（森谷・杉浦・入江・山中, 1993）。現在までに数多くの治療的効果が示されている（森谷・杉浦, 1999）。

このように事例研究が数多いものの、なぜコラ

ジュ療法が心理臨床の現場で有効性が高いのか、そのメカニズムに触れる基礎的な研究は数少ない。コラージュ療法を用いることで、クライアントの内面にどのような作用をもたらすのかが明らかにされないまま、またなぜコラージュ療法を導入したかの理由も示されないまま、カウンセリング場面で用いられることも多い。実証的な研究により、コラージュ療法がもたらす作用が明確になれば、臨床現場において、“どのようなタイプのクライアントに対して、どういった側面に働きかけるためにコラージュを用いるのか”より明確に目的意識をもって使用することができるだろう。そのことは、より効果的な治療を促進するものと考えられる。

2. 自尊感情と自己効力感

沢崎(2007)によると、カウンセリングの目標は、理論的立場によって「問題行動や症状の除去・変化(行動療法)」「認知・感情の変化(認知療法)」「人格の変化・成長(クライアント中心療法)」などがあるが、いずれにしてもその結果として自尊感情の向上が生じていると言ってよい、と述べている(「」内のイタリック体は筆者が加筆)。また、水野(2008)は、カウンセリングにおけるクライアントの心理的成長を知るための重要な手掛かりが、自尊感情の高さだと指摘している。

そもそも、この自尊感情(self-esteem)とは、「社会とのかかわりの中で特定の役割、価値観の達成を通して獲得される自己価値についての確信」(遠藤・井上・蘭, 1992)と定義される。自尊感情の代表的な研究者であるRosenberg(1965)は、自尊感情には2つの内包的な意味があり、自分を「とてもよい(very good)」とみなす場合と、「これでよい(good enough)と捉える場合があると指摘している。前者は、他者と比べて自分は優れているとみなすことにより生じる感情であり、後者は人と比べて決して優れていなくとも、自分が設定した価値基準に基づいて自分を受け入

れ、好意を抱き、尊重しようと思うことである。Rosenberg(1965)は、後者の考えを支持している。本研究でも、この視点に基づいた自尊感情の概念を採用する。

具体的な生活場面で考えると、自尊感情が高い人は、自身の良い面も悪い面も受け入れ、「こんな自分でよい」と評価することができ、多少の苦境にあっても自分自身を大切にすることができる。一方、自尊感情の低い人は、「自分はだめな人間だ」と自己を過少評価してしまい、生きている価値や意味を見出せなかったり、ひきこもりや不登校などの不適応を生じやすい。つまり、クライアントの多くは自尊感情が低い状態であることが想定され、カウンセリングによって、より高い状態へと変容していくことが期待される。

また、自尊感情と関連した自己概念のひとつに自己効力感がある。自己効力感(self-efficacy)とは「外界の事柄に対して、自分は何らかの働きかけができるという感覚」(バンデューラ, 1997)と定義される。この感覚を通して、人は自分の考えや、感情、行為をコントロールすることができる。当然のことながら、自尊感情とは相関が高いが、自尊感情が本人自身の価値に関する感覚であるのに対して、自己効力感は、自分にはある目標を達成するための能力があると捉える感覚である。つまり、カウンセリングにおいて、不適応状態から適応的な状態へと変容するためには、自尊感情を基礎としながらも、自己効力感の高さがあってこそ、クライアント自らが新しい適応的行動や健康な認知スタイルの習得に取り組めると考えられるだろう。金城(2004)は、臨床場面において自己効力感行動の変容を予測し、自己回復力として作用することを指摘している。

3. 非臨床者を対象とすることの妥当性

倫理的な問題もあり、臨床の現場でクライアントを対象とした縦断的研究を行うことはできない。そこで、本研究では、非臨床群を対象とすること

とした。その妥当性について以下で検討する。

近年、コラージュ制作は、臨床場面のみならず、健常者にも自己啓発やリラクゼーション法として用いられるようになってきており、特にコラージュ制作によってネガティブな気分が有意に減少することが知られている(鶴木, 2008; 鶴木, 2009b)。さらに制作回数を重ねても、こうした気分変容効果は減じることがないことがわかった(鶴木, 2009a)。

しかし、非臨床群にとって、コラージュ制作がもたらす効果は、一時的な“気分変容”だけに留まるのだろうかという疑問が生じる。前述したように臨床群に対してコラージュ療法を使用した多くの事例研究(藤掛, 1999; 杉浦, 1994; 森谷・杉浦, 1999など)では、コラージュの作品内容をクライアントが言語化しようと試みることで、クライアント自身が気づけなかった感情を意識化したり、自分の抱える問題と重ね合わせながら、自己理解を深める経過が示されている。面接の経過とともにクライアントの自己評価が高まる様子が記述されることが多い。一方、非臨床群に集団的にコラージュを用いた研究では、制作後、一人ひとりの実験協力者に対して作品の説明を求めることはほとんどない(制作後に作品について評定や自由記述を求めることはあるが、双方向的ではない)。そのような場合であっても、つまりコラージュ作品を制作するだけでも、一時的にせよ自己評価に変化が生じるのであろうか。

荻野(1999)は、高校生を対象にして、コラージュ体験群と非体験群(授業受講)の前後の自己肯定度を比較し、コラージュ群で自己肯定度が有意に高くなり、状態不安が有意に低下したことを示している。しかし、コラージュ体験群では、コラージュ制作だけでなく、呼吸法も同時に実施していること、統計的な処理が充分とはいえない点により、コラージュ制作による効果が検討されたとは言えない。

筆者が、継続的に行ったコラージュ作品の聞き

取りを制作者から行った結果、自分自身に向き合い、自己の理解を深めていく“直接的自己表現”の制作スタイルもあれば、自分自身の内面よりは、素材の内容や色、形に触発されて表現を行う“素材優先”スタイルも見受けられた。前者の“直接的自己表現”スタイルをとる者の中には、自己理解や内面の意識化が進み、自分の置かれている状況やそれに対する自分の姿勢を、コラージュ作品を通して読み取ろうとする者もいる。こうした「自己表出」「自己理解」や「内面の意識化」は、カウンセリングにも共通する要素と言えるだろう。一方、後者の“素材優先タイプ”では、「ピンクで全体を表現してみたかった」「好きなものを全部並べてみた」などといった発言に示されるように、自分の心理状態や有り様などは本人に強く意識化されていないものの、素材に触発される形で、自分の感覚や価値が反映されている点では自己表現のひとつと言えるだろう。こうして完成された作品を通して、制作者は自分自身への評価や価値について再認識すると考えられる。

以上のことより、本研究では、非臨床者によるコラージュ制作は、気分変容効果に留まらず、自己評価、特に自尊感情や自己効力感を向上させるのかを状態変数に着目して検討することとした。

なお、従来のコラージュ研究では、素材を本人に持参させるか、調査者があらかじめ図版を選定し、カラーコピーしたものを全員に配布するかどうかの方法をとっている。しかし、各自に雑誌持参を依頼した場合、持参し忘れたり、充分な量の素材を持参しなかったため、制作後に不全感が強く残る場合がある。また調査者が素材を選定した場合には、制作者の好みの多様性に応じることができない(例:「使いたいものがなくて、納得できる作品ができなかった」など)。そこで、本研究では、調査対象者の嗜好を考慮した上で、全員に同一の素材を配布し、操作条件を統一した。

II. 方法

1. 調査対象者・実施方法

埼玉県内の私立女子大学において、心理学に関連する授業（「臨床心理学概論」）の講義時間を利用して調査を行った。この授業は、心理学系学科1年の必修科目であり、学籍番号の奇数・偶数により、2クラスに分かれて行われる。この2クラスの授業は同一日に行われるが、時間帯のみ異なった（奇数クラス2限・偶数クラス3限）。

調査時期は、2009年11月6日であった。学籍番号が奇数番号のクラス（2限）では、コラージュ制作を行い（コラージュ制作群）、偶数番号のクラス（3限）では、通常通りの授業を行った（統制群）。コラージュ制作群に対しては、授業の一環として、コラージュを制作する旨を伝え、やり方の説明を行ったが、その効果や影響について事前に伝えることはしなかった。なお、事前にコラージュを制作したことがある者は、数名存在したが、グループ制作や美術の授業での取り組みであって、本調査の方法によるコラージュ制作を行った者はいなかった。一方、統制群に行った授業内容は、“心の病に対する理解と対応”に関するものであった。

なお、翌週の授業では、奇数クラスに対し、調査日で偶数クラスに行った授業を行い、偶数クラスに対してはコラージュ制作を施行した。ただし、この回には本研究の調査を行っていない。

調査対象者数（平均年齢±SD）は、コラージュ群55名（18.58±.53歳）、統制群47名（18.53±.67歳）であった。

調査手続きであるが、コラージュ群ではコラージュ制作の前後、統制群では授業の前後に自己効力感と自尊感情を測定する質問紙への記入を求めた。2種類の尺度に回答する時間はおよそ5分程度であった。

2. コラージュ制作

2.1 コラージュ素材の選定

コラージュ制作に必要な雑誌の選定に関しては、できるだけ調査対象者の興味関心の高い雑誌を選ぶことが重要だと考えられたため、事前（2009年10月）に予備調査を行った。まず、第1回（10月23日）の調査として、「最近、よく読む雑誌名をいくつか挙げてください」に対して自由記述で回答を求めた。第2回（10月30日）では、第1回の調査でもっとも多く記入のあった『non-no』（集英社）に対する興味の程度について、「興味ない」から「かなり興味がある」の4件法で尋ねた。その結果、85.6%の調査対象者は程度の違いはあっても「興味がある」と回答し、「興味がない」と回答したのは14.4%であった。そこで、本研究の調査対象者にとって、『non-no』が統一的使用素材としておおむね適正であると判断され、使用することとした。なお、『non-no』は主に女子大学生を対象としたファッション雑誌であり、同世代の女性モデルや洋服、化粧品、アクセサリーなどの写真が多く掲載されている。筆者が以前行ったコラージュ作品の内容分析では、雑誌を調査対象者に持参してもらったが（鶴木, 2009a; 鶴木, 2009b）、その際に確認された切片のカテゴリーと、『non-no』で掲載されている内容は、ほぼ共通している。

2.2 手続き

本研究では、集団でコラージュを行うために、マガジン・ピクチャー法を用いた。調査対象者には、事前ののり、はさみを持参するように依頼した。しかし、八つ切の画用紙及び制作者全員が共通して使用する雑誌（『non-no』2009年11月20日号）は、筆者が用意した。制作にあたって、特定のテーマを設定することはしなかった。

また、制作時には、席が近いと他者の作品に影響を受けることも考えられるため、席をひとつ置きとし、制作を終了するまでは、雑談せず

に制作に集中するように注意を行った。所要時間は60分程度であった。

制作後には、作品に対する自己評価や感想を記述する振り返りシートへの記入を求めた（ただし、結果は本研究では扱わず、別稿に示す）。

3. 質問紙調査

3.1 自尊感情尺度

Rosenberg (1965) が作成した自尊感情を測定する尺度の邦訳版を用いた（山本・松井・山成, 1982）。「だいたいにおいて、自分に満足している」「自分に対して肯定的である」など10項目から構成されている。回答は「あてはまる（5点）」から「あてはまらない（1点）」の5件法であり、各項目の評定を単純加算する。得点可能範囲は、10点から50点である。内的一貫性、因子的妥当性は高いと推測されている（山本ら, 1982）。

自尊感情を測定する尺度は様々開発されているが（Coopersmith, 1967; Janis & Field, 1959）、本研究ではコラージュ制作や授業の前後に複数回測定する必要があるために、調査対象者に負担の少ない尺度を選定することとした。

本研究では、長期的な自尊感情ではなく、測定時点における自尊感情を測定することを目的としているため、施行する際には、「記入の時点でのあなたの状態について、該当する箇所に回答するように」と教示を与えた¹。

3.2 自己効力感尺度

Sherer, Maddux, Mercandante, Printice-

Dunn, Jacobs, & Rogers (1982) が、特性的自己効力感を測定するために開発した自己効力感尺度の邦訳版を使用した（成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995）。「自分が立てた計画はうまくできる自信がある」「何かをしようとしたら、すぐにとりかかる」など23項目から構成されており、「そう思う（5点）」から「そう思わない（1点）」までの5件法で回答する。各項目の評定を単純加算する。得点可能範囲は、23点から115点までである。

性別や年齢別においても、 α 係数は.88前後と非常に高く、主因子法の因子分析では第1因子の固有値が非常に高い1因子解が採用された（成田ら, 1995）。よって、信頼性・妥当性ともに高い尺度であるといえる。

ただし本研究では、長期的な自己効力感ではなく、測定時点における自己効力感を測定することを目的としているため、施行する際には、「記入の時点でのあなたの状態について、該当する箇所に回答するように」と教示を与えた²。

4. 倫理的配慮

調査対象者には、本研究で使用されるデータは個人的な解析を行わず、統計的に処理すること、データの保存管理、及び研究終了後の適切な処理について説明を行い、同意を得た。

5. 解析方法

結果の統計処理はすべて PASW statistics 17.0 for Windows (SPSS, 2009)で行った。

¹ 状態自尊感情尺度（阿部・今野, 2007）が開発されているが、この尺度の項目は、Rosenberg (1965) の邦訳（山本ら, 1982）の項目の前に「いま」を加筆したものである。本研究では施行時に記入時点での状態を問うているため、本質的な結果の違いには至らなかったと考えている。

² 東條・坂野 (2003) によると、自己効力感は、何らかの特別な訓練や経験を積んだ行動遂行場面以外では、行動の遂行可能性に対する見通しは、個人の中では比較的安定しているという。本研究で取り上げているコラージュ制作といった行為は、ほとんどの調査協力者にとっては初めて経験する特別行動遂行場面と考えられ、自己効力感が変容する可能性が示唆されている。坂野自身も一般性セルフエフィカシー尺度により、行動変容のためのセッションによる継続的な変化を計測している（坂野, 1989）。

Ⅲ. 結果

1. コラージュ制作群及び統制群における前後の自尊感情の比較

コラージュ制作をした群と、コラージュ制作をせず、通常の授業を聴講した群では、その前後で自尊感情にどのような変化が生じたかを見るために、2群の事前事後の自尊感情得点について平均と標準偏差を算出した（表1・図1）。大学生を対象とした他の研究では、平均（SD）が28.01（7.32）であったことと比べると（阿部・今野, 2007）、本研究対象者は26程度とやや下回るが、

ほぼ平均的であることが示された。

さらに、コラージュ制作が自尊感情に与える影響を検討するために、群（2：コラージュ制作群・統制群）×時期（2：事前・事後）の二元配置の反復分散分析を行った。その結果、群の主効果に有意差は見られなかったが（ $F(1,100) = .10, n.s.$ ）、時期の主効果に有意差が見られた（ $F(1,100) = 4.37, p < .05$ ）。群と時期の交互作用がみられなかった（ $F(1,100) = .95, n.s.$ ）。よって、2群ともに活動の前よりも後で自尊感情が有意に高くなっていることが示された。

表1. コラージュ制作群と統制群における前後の自尊感情得点

	コラージュ制作群 (N=55)		統制群 (N=47)	
	M	SD	M	SD
前	26.75	6.51	26.34	6.58
後	27.75	5.95	27.40	7.21

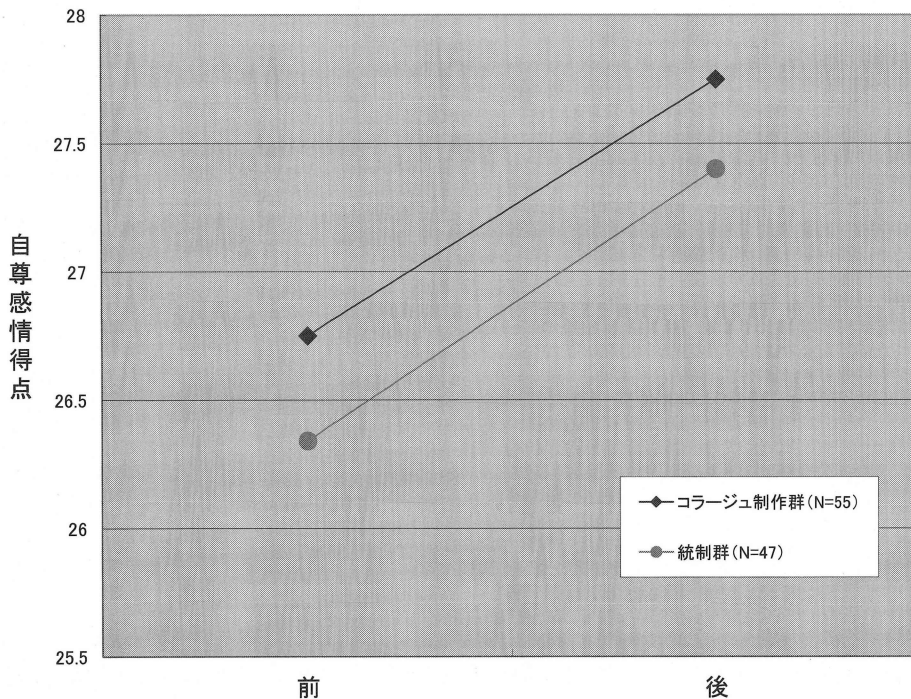


図1. コラージュ制作群と統制群における前後の自尊感情得点

2. コラージュ制作群及び統制群における前後の自己効力感の比較

コラージュ制作を行った群と、コラージュ制作をせず、通常の授業を聴講した群では、その前後で自己効力感にどのような変化が生じたかを見るために、2群の事前事後の自己効力感尺度得点について平均と標準偏差を算出した(表2・図2)。清水(2007)は成田からの私信によるデータを提示し、18~24歳女性の平均(SD)は、76.42(10.57)あることを示している。この数値に比べると、本研究対象者は事前の平均が65前後であることから、全体に自己効力感が低いことが示され

た。

さらに、コラージュ制作が自己効力感に与える影響を検討するために、群(2:コラージュ制作群・統制群)×時期(2:事前・事後)の二元配置の反復分散分析を行った。なお、統制群のうち、欠損値のあった2名のデータを除いた。その結果、群と時期の交互作用が有意となった($F(1,98)=9.44, p<.01$)。交互作用の原因を見るために、単純主効果を検定したところ、コラージュ群は制作前に比べて制作後で自己効力感が高くなったことが示された($F(1,98)=11.22, p<.01$)。事前得点において群間の差はなく、統制群において

表2. コラージュ制作群と統制群における前後の自己効力感得点

	コラージュ制作群 (N=55)		統制群 (N=45)	
	M	SD	M	SD
前	64.15	11.30	66.07	11.15
後	67.84	11.41	64.71	10.85

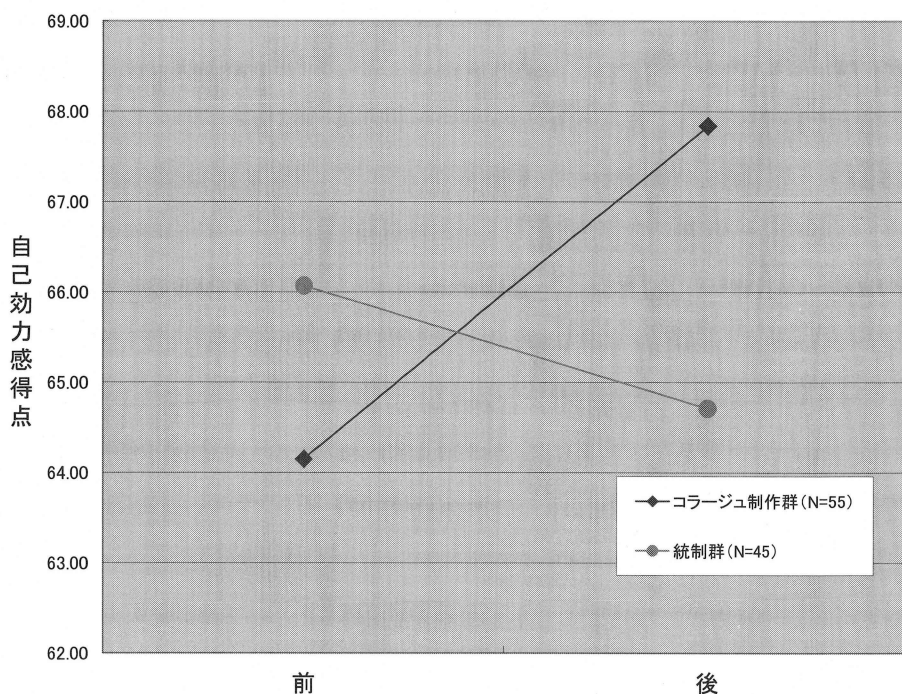


図2. コラージュ制作群と統制群における前後の自己効力感得点

時期（前後）の差は見られなかった。

3. 自尊感情と自己効力感の関係

両尺度の関係を明らかにするために、事前・事後それぞれのピアソンの相関係数を求めた。その結果、事前では.53($p < .01$)、事後では.64($p < .01$)と、中程度の有意な相関関係が示された。

IV. 考察

1. コラージュ制作が自尊感情に与える影響

本研究の結果より、コラージュ群も統制群も共に、有意に自尊感情が高くなっていた。自尊感情が短時間で変容するには、誘因として外的な働きかけがあることが想定される。大学生が授業を受講したことにより、大学生としてその日に行うべき勉学のスケジュールのひとつを終了したという感覚がこの結果となったことも考えられるだろう。

コラージュ制作群における自尊感情の向上について考察したい。コラージュ制作では、すでに印刷媒体として完成されたもの（プロのカメラマンにより撮影された写真など）を素材として使用する。そのために、他者が見て明らかに失敗とみなされるような作品が完成することはほとんどない。描画テストのように、絵の上手い下手が如実に表れやすい検査と異なり、制作者の美的満足感が得やすいこともコラージュの特徴だと指摘されている（藤掛，1999）。コラージュ制作では、一般的な外的な基準よりも、自分内部の準拠枠に照らした上での満足感を得ることが多いのではないだろうか。通常、私たちは自己概念を形成する際に、身体的特徴や知的能力、社会的地位など外的な基準を基にして判断する/されることが多いが、コラージュ制作に関しては、そうした枠組に各人が組み込まれることがないために、自分の内部にある価値基準を再認識するのではないだろうか。Rosenberg (1965) の言う「これでよい(good enough)」という感覚により、自己に対する評価、肯定感、受容感が高くなったため、自尊感情を強

く感じる結果になったのではないかと考えられる。しかし、統計的に有意ではあったものの、平均値の変化で見ると+1.0とサイズが小さいため、慎重に解釈する必要があるだろう。

2. コラージュ制作が自己効力感に与える影響

本研究の結果より、コラージュ群は統制群に比べて、有意に自己効力感が高くなった。

自己効力感の形成にあたっては、4つの要因が指摘されている（バンデューラ，1997）。まず、「①達成体験」である。これは、自己効力感形成に最も重要な要因であり、自分自身が何かを達成したり、成功したりした経験のことをいう。次に、「②代理体験」である。①のように自分が達成・成功しなくても、自分以外の他人が何かを達成したり成功したりすることを観察することである。さらに、「③言語的説得」は、自分に能力があることを他者により言語的に説明されることであり、「④生理的情緒の高揚」は、酒などの薬物やその他の要因により気分が高揚することである。さらに近年、5つめの要因として、「⑤想像的体験」が指摘されるようになった。これは、自己や他者の成功経験を想像することである。

これらの5つの要因に基づき、コラージュ制作がなぜ自己効力感を高めることになったのかを考察したい。まず、コラージュ制作により、自己表現ができたという達成感が背景にあるだろう。制作後の口頭での感想の一例を紹介する。「最初は白い紙に自分がコラージュなんてできるのかな、と思っていたけど、やりだしたら、どんどんイメージが広がって…。結果的にすごくちゃんとしたものが出来上がったので、びっくりした。自分でもできるんだなって(笑)」というものもあった。芸術的な趣味を持つ学生以外は、久しぶりに自分で作品を作ったという経験（非言語的自己表現）になったようである。また、コラージュ作品の鑑賞・評価には、特定の評価基準がないために、他者からの目を気にする必要がないことから、自己効

力感形成に最も重要な役割を果たす「①達成体験」が得られやすいと考えられる。また、集団式のコラージュでは、制作終了後、近くの席の人の作品を見ることも可能であり（制作中は他者の作品を見たり、言葉を交わすことを制限しているが、終了後はその限りではない）、他者の達成した様子を見ることができる。試験などの場合は、結果を公表した場合、得点の高低でお互いに気まずい思いをすることもあるが、コラージュではそうした気遣いがないため、他者が作品を完成した様子を見ることは「②代理経験」にもなるだろう。さらに制作中には、なりたい自分（理想像）や行きたい場所を表現することもテーマとして多いため、「⑤想像的体験」をするものも少なくないと思われる。このような要因から、自己効力感が高まったことが推察される。

しかし、平均値の変化で見ると+3.69となった。得点範囲の大きさからすると、変化値のサイズは小さいため、より慎重に解釈する必要があるだろう。

3. 自尊感情と自己効力感の関係

両構成概念は、問題と目的の節で述べたように関係が強いものと考えられるが、事前事後ともに相関係数では中程度の正の相関であった。つまり、共通する側面もあるが、異なる部分があることが反映された結果だとみなせる。特に自尊感情が現在の自己評価に重点が置かれているのに対し、自己効力感では、現在のみならず今後の自分の能力、可能性が含まれる点が異なっていると考えられる。

V. 今後の課題

一部統制条件に検討すべき課題が残されたが、コラージュ制作をすることで状態的な自尊感情や自己効力感が高くなるのが本研究により示された。また従来のコラージュ研究では、素材が不統一であったために、調査協力者間の条件が不均等であったが、本研究では調査協力者の嗜好を重視

し、雑誌媒体を統一して施行することで、方法上の問題点を補うことができた。

近年、自尊感情に関する研究領域は、特性としてだけでなく、安定性という視点からの検討も重視されている（遠藤ら、1992）。本研究では、短期間での状態的な変容を取り上げたが、今後は安定性にどのように関連するかも課題のひとつになるだろう。

また、本研究では、非臨床者におけるコラージュ制作の心理的変容を検討したが、臨床現場でコラージュ制作だけが行われることはほとんどなく、セラピストとの信頼関係や面接内容が相互に作用しながら、治療効果へ関与している。本研究により示されたことは、必ずしも臨床現場でのコラージュ療法の効果そのものとは言い難いが、基礎的資料となったといえるだろう。

さらに今後は、これらの基礎的研究の結果をふまえ、自尊感情が低くなりがちな人たちへの展開も検討していきたい。そのひとつとして、特別支援学級や児童養護施設の子どもたちの心理的支援のためにコラージュを教育支援プログラムとして構成し、実施することも考えられる。本研究では、個別に肯定的な評価を第三者から受けるという機会はなかったため、自己効力感の形成要因のうち、「言語的説得」の要因は関与しなかったが、コラージュ・グループを作り、互いに言語的な肯定的評価を行うことで、自己効力感を高める、より効果的なコラージュの使用が可能となるのではないだろうか。またお互いのソーシャル・スキル向上や他者理解へもつながる可能性を秘めているものと考えている。

VI. 引用文献

- 阿部美帆・今野裕之 2007 状態自尊感情尺度の開発
パーソナリティ研究, 16, 36-46.
- A・バンデューラ（編著）1997 本明寛・野口京子
（監訳）激動社会の中の自己効力 金子書房
- Coopersmith 1967 The antecedents of self-esteem. San

- Francisco: W. H. Freeman.
- Janis, I. L., & Field, P. B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In C. I. Hovland, & I. L. Janis (Eds.), *Personality and persuasibility*. New Haven: Yale University Press.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 (編) 1992 セルフエスティームの心理学——自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- 藤掛明 1999 非行臨床におけるコラージュ療法 森谷寛之・杉浦京子 (編) 現代のエスプリ コラージュ療法 至文堂
- 金城辰夫 2004行動主義 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 (共編) 心理臨床大辞典改訂版 培風館 161-165.
- 水野邦夫 2008 自尊感情尺度 國分康孝 (監修) カウンセリング心理学辞典 誠信書房 131-132.
- 森谷寛之・杉浦京子 1999 現代のエスプリ コラージュ療法 至文堂
- 森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康浩編 1993 コラージュ療法入門 創元社
- 成田健一・中仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 1995 特性的自己効力感尺度の検討——生涯発達の利用の可能性を探る 教育心理学研究, 43, 306-314.
- 荻野正廣 1999 自己啓発・自己理解としてのコラージュ体験授業 兵庫県立教育研修所心の教育総合センター 心の教育授業実践研究, 1, 101-111.
- Rosenberg, M 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press
- 坂野雄二 1989 一般性セルフエフィカシー尺度の妥当性の検討 早稲田大学人間科学研究, 2, 91-98
- 沢崎達夫 2007 自尊感情を取り戻すカウンセリング 児童心理, 862, 979-984.
- Sherer, M., Maddux, J.E., Mercandante, B., Printice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R.W. 1982 The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, 51, 663-671.
- 清水裕 2007 自己評価・自尊感情 堀洋道 (監修)
- 山本眞理子 (編) 心理測定尺度集 I サイエンス社 37-41.
- 杉浦京子 1994 コラージュ療法 川島書店
- 東條光彦・坂野雄二 2003 セルフエフィカシー尺度 上里一郎 (監修) 心理アセスメントハンドブック第2版 西村書店 425-434.
- 山本眞理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 鶴木恵子 2008 神経症傾向者に対する効果的なリラクゼーション法の検討——コラージュ制作と自律訓練法の比較——十文字学園女子大学人間生活学部紀要第6巻, 197-207.
- 鶴木恵子 2009a 継続的コラージュ制作がリラクゼーション効果及び作品の自己評価に与える影響 十文字学園女子大学人間生活学部紀要第7巻, 201-210.
- 鶴木恵子 2009b コラージュ制作が心理生理的反応に及ぼす影響 十文字学園女子大学人間生活学部紀要第7巻, 211-218.

付 記

本研究にご協力下さった受講生の皆さん、田村祥子さんに心から感謝いたします。